

■知的障害のある子どもたちへの実践事例

身近な地域で多様な他者をつなぐ力を養うために

—マルチメディアDAISY図書を活用した資質・能力向上の取り組み

鹿児島県湧水町立栗野中学校

松田ひとみ

はじめに

本校は、鹿児島県北部にある公立の中学校です。1年生43名、2年生44名、3年生43名の計130名が在籍し、「自主」「創造」「友愛」を校訓とし、「ふるさとを愛し、豊かな心を持ち、自ら考動できる生徒」の育成を目指しています。また、この教育目標を達成するためのキーワードとして「S・O・S（スモールワンステップ）の構築」を掲げています。

次期学習指導要領では、「社会に開かれた教育課程」「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」とともに、「カリキュラムマネジメント」が重要なポイントとなります。

本実践はそれをふまえ、年度当初に掲げられた栗野中学校のグランドデザインの実現に向けた教育実践の一例となります。

すべての子どもたちが「持てる力を最大限に発揮」し、自身の明るい未来を創造していくために大切なことは、子どもたち自身の未来に向かう力を育むことだと考えます。

この先の未来において変化の著しい予測困難な時代が到来したとしても、子どもたちにはその変化に柔軟に対応し、自身の明るい未来を創造し続ける力を持ち続けてほしいと願っています。

マルチメディアDAISY図書 活用にいたる流れ

本実践研究を進めるようになってから4年になります。特別支援教育に携わる一人としてマルチメディアDAISY図書がもつ、以下の5つの機能の教育的効果についての研究を続けています。

- ①音声読み上げ機能（読むスピードも調整可能）
- ②文字のハイライト機能
- ③文字や絵の拡大機能
- ④自動ページめくり機能
- ⑤どこでも気軽に使える教育機器的機能

年齢やさまざまな障害種にかかわらず、読書に対してさまざまな困難のあるすべての人に有効な読書ツールとして誕生したマルチメディアDAISY図書は、使用方法によっては、子どもたち

の景色を彩り豊かにする可能性をもっています。

また、「わかる・できる授業」を目指すうえで、ユニバーサルデザインの視点から子どもたち一人ひとりが持つ力を最大限に発揮するための教育的環境を整えることも重要な課題となります。

その点において、iPadでの活用もできるマルチメディアDAISY図書は、衛生上配慮が必要となる病弱な生徒が使用する際は、入院時に無菌室への持ち込みも可能です。そのため、⑤で示す「どこでも気軽に使える教育機器」として基礎的環境整備に伴う役目も果たすツールといえます。

また、前述したような①～④の4つの機能においても、子どもたちの困り感に応じた合理的配慮を進めながら授業を行うことが可能です。

今回の実践研究においても、まずこれらの点に着目し、子どもたちの特性を最大限にいかすための効果的な活用が行えるかどうかを見極める作業を行いました。客観的なデータとしては「面接法・行動観察法・WISK・チェックシート・スクリーニングテスト・パーソナルスキルチェック」等に着目しました。これらについて十分に検討したうえで、今回のマルチメディアDAISY図書の活用を行いました。



特別支援学級の生徒も一緒に みんなで朝読

実践研究の目的

今回の実践研究では、マルチメディアDAISY図書がもつ5つの機能をいかし、一人ひとりの子どもたちが「身近な地域で多様な他者とつながるための力を養う」ことを目的としています。

実践研究の方法について

今回の実践では、特別支援教育や知的障害教育の独自の視点（教育課程の枠組みや位置づけ・個別の教育支援計画や個別の指導計画の作成および活用）をいかした「教科等横断的な視点からのカリキュラムマネジメント」を基盤としています。

また、全教科にわたった横断的なアプローチを進めていくための第一段階として、「国語」「自立活動」「生活単元学習」の教科における実践としての取り組みになります。

実践事例について

本校には「知的障害特別支援学級（総

合1組)」と「自閉症・情緒障害特別支援学級（総合2組）」の2つの特別支援学級があります。

私が担任をしている総合1組では、「国語」や「自立活動」「生活単元学習」の授業を通して、マルチメディアDAISY図書をさまざまな方法で活用しています。今回の実践事例として、自立活動と国語科の授業での活用例について報告します。

マルチメディアDAISY図書 活用の実例

(1) 対象となるクラスの実態

今回の実践研究の対象となる生徒は、特別支援学級総合1組に在籍する生徒4名（1年生1人・2年生2人・3年生1人）です。学級目標には「メタモルフォーゼ～一歩ずつよりよく成長しよう～」を掲げています。

また、学習によるつまづきをフォローするために、職員全体でそれぞれの子どもたちへの支援や配慮についての共通理解を図り、私自身が授業を行う際にも、カウンセリングマインドの具現化に努めながら指導を行っています。

さらに、教育課程の編成においては、子どもの実態に応じて「各教科」「道徳」「総合的な学習の時間」「特別活動」に加えて、障害による学習上または生活上の困難の改善や克服を目指した指導領域である「自立活動」と、各教科を

合わせた指導として「生活単元学習」を位置づけています。

(2) 個々のニーズに応じた活用について

今回の実践研究では、個々の子どもの教育的ニーズに基づいてマルチメディアDAISY図書を活用するために、以下の点に着目しながら活用を進めました。

とくに「身につけたい資質能力」に関しては、仙台市教育委員会が作成された平成22年度特別支援教育推進資料「特別支援教育における自分づくり教育」の2ページに示されている「五つの育てたい能力や態度」をもとに、本校の生徒の実態に合わせて、4つの具体的目標を設定しました。

「身近な地域で多様な他者とつながるための力を養う」ための3つのキーワード

①自立につながる力を育む

→自ら考え行動する力の育成、情報活用能力の育成、ライフキャリア教育の推進

②コミュニケーション能力の育成

→コミュニケーションスキルの向上・場に応じた発言・行動

③学びのつながりによる関連性の視覚化

→個別の支援計画をもとに個に応じた身につけさせたい資質・能力の明確化（何ができるようになるか・何を身につけさせたいか）

【身につけさせたい資質・能力の具体例】

ア 関わる力

- 考えや気持ちを伝え合い協力できる力
- 人や地域を大切にする力

イ いかす力

- 調べる力
- 情報を生かす力

ウ うごく力

- 何事でもやりとおす力
- 積極的に挑戦する力

エ みつめる力

- 自分のよさや他者との違いを理解できる力
- 忍耐力やストレスをコントロールする力

(3) マルチメディアDAISY図書との出会い

授業に際し、子どもたちにマルチメディアDAISY図書の利用について確認したところ、これまでの学習で利用したことのある生徒は1人もいませんでした。

このクラスには、興味のないものに対して動きが固まったり、集中の持続が困難になったりしがちな子どもたちが在籍しています。しかし、子どもたちは教師のもってきた新しい教育機器を見て、「それはなんですか?」「どうやって使うんですか?」「ちょっとさわってもいいですか?」と興味津々な様子でした。

今回の実践研究では、マルチメディアDAISY図書の活用にあたる前段階で生活単元学習において、「わいわい文庫」のキャラクターであるクマの「トモちゃん」の作製に取り組んでいたこともあって、実際に「わいわい文庫」の画面を開いて説明した際には、「あっ、あのクマはこのクマだったんだ」とすぐに気づいた生徒もいました。「すごいね。すぐ気づいたね。そうだよ。今作っているクマは、マルチメディアDAISY図書「わいわい文庫」のキャラクターで、「トモちゃん」というんだよ」と教師が話をすると、そこから子どもたちの会話が発展していきました。

新しい取り組みを行う場合には、子どもの実態を踏まえて、教師の側でさまざまなしかけを行うことが重要ではないかと考えます。



トモちゃん

(4) マルチメディアDAISY図書の活用例

① 自立活動の授業の実践例

【本の情報】

『ともだちや』は内田麟太郎さんの文と降矢ななさんの絵によるこのシリーズ第1作目の人気絵本です。ちょっと胸

がキュンとするような話が展開され、幅広い年齢層に愛されている作品です。



【活用の実際】

特別支援学級では、子どもたちの実態に応じて、個に応じた自立活動の年間計画を立てます。さらに長期目標を達成するために、学期ごとの短期目標を立てて授業を行います。この授業で用いた『ともだちや』は、SST（ソーシャルスキルトレーニング）に基づく授業展開の導入部分で使用しました。

「ほんとうのともだちって、どんなともだちのこと?」「そもそも、ともだちってどうしたら作れるの?」「自分が考えるほんとうのともだちって、どんな関係のともだちのこと?」「自分以外のクラスの仲間はほんとうのともだちについてどんなふうに考えているのかな?」、そういう疑問について自ら考え、クラスの仲間の意見を聞き、さらに意見を述べ合いました。それをもとに場面設定を行い、ロールプレイングによるSSTを行いました。

「ともだちのことで悩むことってたくさんあるよね。でも、ともだちがいてくれたおかげで楽しいことが増えることだってあるよね。ともだちのことで悩むことはともだち関係について真剣に考えているってことだから、それはみんなの成長の証でもあるんだよ。大事なことは、ともだちのことで悩んだときに一人きりで

悩まないってことだよ。一人で悩みを抱えても苦しいばかりだから、そんなときは一緒に考えようね。笑うことだけがいいことじゃないよ。泣くことも、怒ることも、笑うことと同じくらい大切なことなんだよ。」と、生徒たちに話をしました。

生徒たちにとって親しみやすい色鮮やかな絵と、わかりやすい言葉で描かれている絵本を使用すると、生徒たちの興味・関心が高まり、集中力を維持する時間が長くなります。これは、これまでの実践研究においても同様の結果が出ており、絵本を活用することでもたらされる教育的効果を改めて感じました。



自立活動における授業風景

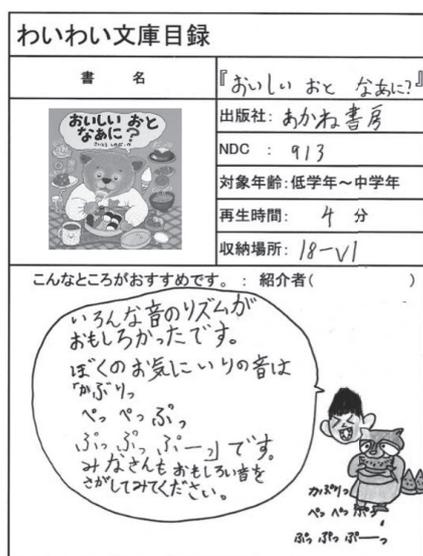
②国語の授業の実践例

【本の情報】

『おいしい おと なぁに?』は、食べ物に関する擬音語がたくさんつまった本です。読みながら擬音語のリズムのよさにつられてついつい「じゅーじゅー」「むしゃむしゃ」と口ずさんでしまいそうになる楽しい絵本です。

【活用の実際】

これは国語の読書教材の発展授業として活用した例です。「これまでマルチメディアDAISY図書を読んだことのない小学生に、この中からこの本おすすめだよ、と紹介するとしたらみんなはどの絵本にするかな？」と尋ねたところ、生徒Aが選んだのがこの絵本でした。



「がぶりっ」はわかるけど、「ぷっぷっ ぷー」はなにかな?と教師が質問すると、生徒Aは「ここにタネが飛んでいるから、僕はタネを飛ばすときの音だと思います」と絵本の絵をもとに具体的に説明することができました。「僕はこの音がおもしろいと思います」と、ニコニコしながら説明する生徒の話聞きながら、生徒A自身の「相手にわかりやすく説明することができる」という短期目標の達成を感じました。

「小学生のために本を選び、わかりやすく紹介する」というミッションを遂

げるためには、相手の立場に立って選書をし、わかりやすく説明するという2つの目的を果たす必要があります。また、それらをやり遂げるためには、まず自らがその絵本の世界を楽しめるかどうかということが重要なポイントとなります。

明瞭な発音に課題がある生徒Aにとって、相手にわかりやすく自分の考えを伝えるということは時にストレスを伴うこともあります。しかし、今回は正しい口形を意識した発音練習やコミュニケーショントレーニング等の学習の積み重ねに加え、新しい読書体験を加えたことで更なる力の定着が図れたと感じています。ちょっと手を伸ばせば達成できる目標を授業ごとに設定し、スモールステップによる積み重ねを行うことで生徒たちの意欲も高まりますし、自己肯定感につなげることも可能です。

マルチメディアDAISY図書のもつ「ハイライト機能」や「読み上げ機能」は、子どもたちにとって単語や音声のまとまりを意識させる効果があり、「正しく読み、正しく発音する」ことに対して苦手意識をもつ生徒の読み書きに対する障壁を薄くする効果があると感じました。

おわりに

本実践研究は、「身近な地域で多様な他者とつながるための力を養う」うえ

での資質・能力の向上をめざしています。とくに、今回は「教科等の横断的な視点からのカリキュラムマネジメント」を基盤とし、特別支援教育や知的障害教育の独自の視点をいかして行いました。今後も生徒たちが獲得した語彙力をいかして円滑なコミュニケーションが図れるように、個々に応じた目標を設定するとともに、効果的な教育機器の活用についても、さらなる研究を進めていきたいと考えています。

